





吾子固實性未あり其初学の者にして行々
 其大なる今や是子儼として一字を博し倡言性来
 の我編と著者し頭書子凡て技家子りて拵る事
 之れと拵出して唯吾子の臨牒を讀む便く其意と
 予屢劫考の法と其意と以下も不知して是と
 編と匡く十返舎のりしは徳里を挑役と俟り急
 其果して例の文ある筆の細うると孰と究し
 存し程をいへるも解りの未あり

乙丑春

酒上登呂里誌 齋

13
 1997
 卷

倡言性来
 吾子固實性来
 其初学の者
 行々

倡賣往來自序

夫高賣ハ草の種本草とがぬハ佳珠の
味ハ味ハして掛直を味ハ佳珠あぬバ元
出を減る押客の味ハ並子滑負さる似
多山浪子も滑さこの内正味ハ刀せて心果
あぞ何と利を取じて情をくらの詮あり
むや故子客と誑さるハ彼地の倡賣往

序一

来往故昔の質の質はあれば仮名でつた
の手袋ひそるは古のくまは夫は往のありは
字覚し予が居續も高士買のや性もあつる
倡賣のつぎられ葉種とて書集て取敢む倡
賣往來と命するハ文化ニホのありと

北曲新海樓花月ありて

十返舎一九戲誌

源仲傳 治春太夫

潮来唄はくし

○外ふまきとたあつのもせうち
 ちよれみづもさやみづく
 ○あつ男ふとさぬくし
 づーやじもが縁ぢけし
 ○あつ男ふとさぬくし
 ちよれみづもさやみづく
 ○あつ男ふとさぬくし
 づーやじもが縁ぢけし
 ○あつ男ふとさぬくし
 ちよれみづもさやみづく
 ○あつ男ふとさぬくし
 づーやじもが縁ぢけし



白紙と二寸四方ふ切二ツあり
 又白紙のよ封トてを客のうへ
 きと客の中へてやべーは法はは
 のたかりおふていませど江戸
 系町中へりるう羽ゆ我中
 みこりてを海あり

魚



あつ男ふとさぬくし
 ちよれみづもさやみづく
 ○あつ男ふとさぬくし
 づーやじもが縁ぢけし
 ○あつ男ふとさぬくし
 ちよれみづもさやみづく
 ○あつ男ふとさぬくし
 づーやじもが縁ぢけし
 ○あつ男ふとさぬくし
 ちよれみづもさやみづく
 ○あつ男ふとさぬくし
 づーやじもが縁ぢけし

魚はくし
 日報と新法
 白紙と二寸四方ふ切二ツあり
 又白紙のよ封トてを客のうへ
 きと客の中へてやべーは法はは
 のたかりおふていませど江戸
 系町中へりるう羽ゆ我中
 みこりてを海あり

○ふら男とはあらしんど
 ぶら男のちもいとやせぬ
 ○くせろげんふをうそで
 けりてあんなまゝのちひ
 ○まねておろとあう向さぐ
 ちうぬくふさるまけち
 ○まゐるあまふのちひ
 ひもんあまふとあまふ
 ○あまふふのあまふのせ
 さげまゝあまふのちひ
 ○あまふもあまふのちひ
 かりあまふのあまふ

山東庵著述の小冊子見ゆ

年中月並り日

| | |
|----|-----|
| 正月 | 初むま |
| 二月 | 初むま |
| 三月 | 朔日 |
| 四月 | 朔日 |
| 五月 | 朔日 |
| 六月 | 朔日 |
| 七月 | 朔日 |
| 八月 | 朔日 |
| 九月 | 朔日 |
| 十月 | 朔日 |

家務よりあつてまゐり十二月廿日迄
より見せをひくもあや

席八



客帳の志すめやう

| | |
|----|--------|
| 初日 | あまふのちひ |
| 二日 | あまふのちひ |
| 三日 | あまふのちひ |
| 四日 | あまふのちひ |
| 五日 | あまふのちひ |
| 六日 | あまふのちひ |
| 七日 | あまふのちひ |
| 八日 | あまふのちひ |

九知純

倡賣往來辨解
 九高賣持扱
 嗽暖陀乃生々
 香子乃生々様の聖
 昌孫又極月あ日の
 俗難火つ小提灯の
 出さのゆるあけさ
 中さのゆるあけさ
 中さのゆるあけさ
 中さのゆるあけさ

倡賣往來
 九高賣持扱
 嗽暖陀乃生々
 香子乃生々様の聖
 昌孫又極月あ日の
 俗難火つ小提灯の
 出さのゆるあけさ
 中さのゆるあけさ
 中さのゆるあけさ
 中さのゆるあけさ



元日のくさく本のこりい
 けして
 たりさる松あふの乳
 十返一
 九

せぬる人へてくる人
とあり 後万載集小
 掛るは喉とつて持
 さまごすまゝ。とつと
 中へ取でぬまゝの
 取くあつてもは射るり
 ○ 舞の舞も入りのみ
 徒然神 福もぬころ
 とあり 源氏 小福かけ
 人へ邪傳ちつとふ



らむん
 りやごうりつと
のうそ
 のふたつとあつたの候
 かつり 花鳥集 小 鶯
 とまゐてゐるのふたり

香白新 寂之思也
 客集 一之金子
 大 万石 舞臺 部
 終 終 終 終 終
 車 多 功 情 劫 官

必 集 出 之 様 ち ち ち
 蠟 燭 紙 垂 垂 垂
 小 老 向 側 人 亦 之
 此 亦 鋪 初 終 席 之
 歌 會 堂 乃 純 子 紗



差子押返らるる夏
 赤ねぐさくしやう
 〇不取仕場を要合
 とはは四登の仕場よ

針漉込後荷之
 拾遺物帷子扱
 着蒲團敷帳
 拵活衣本者容
 令痛皮又後

〇客入は夏附せせ
 同登の器み入並と
 店者のせうと
 〇客入は夏附せせ
 同登の器み入並と
 店者のせうと

綾縷子綸子縮
 海反物屏物仕
 看物生綿栴
 本綿麻苧田中
 大恩寺前於

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

まろの工面も
おれよくあり。又
の麻をつける
会ひのときも
まろの工面も



ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

ついでにどろみで
合せてのて花乳
のふくと珍味
のていなり

坂本を家におく
 八白夢の哥合小先
 生之林物とるそと又
 居そとるんげそと
 蓬萊かめの子と
 又るもは孫と乃遠
 一もろい
 ○酒歌勢波あがふ
 先阻は仕あるとこの
 影と七色合て客の

之仕着鳳凰舞
 霧松扇表衣着
 松と深挿衣槍
 母を公のあてき
 下籠るも衣五



肉具と呪心さる
 了あつは花経普
 門品小咒咀諸毒未
 所とあつはせいの
 の毒せ未とあつと
 増え分假教衆
 店老後人通人似
 多山利に相客客
 漢清持人他電
 世世好嬉好き

○夜々々改改初のりい
 寛保の改三浦孫
 抱持母うこ溜との子
 此身より初て我を
 とおまじしあ一云傳子
 要治ハ格子女身
 みては財分の細見死
 里鹿子子入る
 ○蘇物仕のさハ
 子持より若者入りへ



の者へ生まねば
 此の日子出を例之
 諸證文字形並
 仕忌々後々々々

陽遊子遊気也
 大見世と客茶屋
 船の江戸神比神
 有以夫癒之者
 一仲傳者松菰

友浪三味子と蘇
 十国子七家浪其
 外世癒之者本令
 同傳花娘去味
 出思一屋揚代

〇刷掛と云ふをその宛
 のりこけ里ふらう。
 〇刷掛と云ふをその宛
 のりこけ里ふらう。
 〇刷掛と云ふをその宛
 のりこけ里ふらう。



〇刷掛と云ふをその宛
 のりこけ里ふらう。
 〇刷掛と云ふをその宛
 のりこけ里ふらう。

又世新造附家
 或身未有三
 究河為又正六
 客人も白鳥
 奉役買物難氣

〇刷掛と云ふをその宛
 のりこけ里ふらう。
 〇刷掛と云ふをその宛
 のりこけ里ふらう。

○客ハ七ツノ也入ト
 ヤコトモ
 候 彼 流 ト ヒ ヒ け 不
 揚 ト 店 志 ト 云 物 日
 出 て よ ろ 番 置 カ ト 指
 ち び ぬ ぐ 力 の ぬ る



山利ハのこらひる。
 飛 猿 大 と 猿 人 孫
 こ ち り 孫 こと 及 男 力
 の 事 之 古 新 孫 こと

心 屋 匠 厨 園 早 帝
 車 色 心 後 史 之 漬
 茶 葉 者 美 匠 之 志 柳
 歎 固 志 之 年 及 之
 割 麦 及 版 幕 亦 之 内

耳 之 後 香 之 本 之 香 様
 心 神 志 之 者 之 志 切 蒲
 所 以 條 亦 志 之 子 之 志
 之 字 之 屋 之 志 之 付 之
 金 平 外 之 志 之 志 之 籍

志あ々らくくおまやま

ままぐくあありり 小野篁

哥あ字ら尽り ねこのめねこ 小こ子ら子ら子ら

とありり

○遊あ手ら遊ら合らとまのら

先あまらのらつらをらまらひ

をあとらてらつらをらまらひ

あありり どゆらへらもらあらり

はあららうらうらいらふら後らのら

るあのら後らのら異ら名らとら

荒あ布ら注ら揚ら茶ら封ら

小こ者ら骨ら骨ら骨ら骨ら附ら

王あ井ら山ら海らとら異らるら

腹あ蓋ら五ら子ら子ら鳥ら草ら

蒲あ鉾ら河ら草ら漢ら蕨ら厥ら

はあまらさらるらとらつらあらり

元あ三ら天ら師ら御ら園ら抄らす

緑あ馬ら附ら前ら程らとら

あありり

○春あのら字ら屋らハら美らのら

送ありり物ら仕ら出ら一らをらあらり

むあじらしら小ら田ら原らをら在らちらをら

とあつらみらのらあらりり初らめら未ら女ら

くあハら吉ら原ら大ら全らならららひらまら

昔あ梅ら年ら申ら行ら古ら又ら不ら足ら之ら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

ああららうらああららうらああららうらああららうら

又塵劫記小キ

の字とつゝの紙やの

符牒小て匠の教へ

〇慢啗の海老煮の

地はちや 評判記小

悉ひ義の大極上之吉

小て位信。是小仍て

〇〇〇ひぬけりるを

慢啗と志下つけるを

唐詩選 小深を慢

み六小頃御身坐之

法長酒乱好色

或ま不毎る酒之

引成血揚全醉

附合子極慢啗

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇



客とのせる者ゆへ馬
 のくまよきとて。やま
 よう彼も移るごと
 とらうぐふといふ客替
 といふやういふは同じ

客は客の客の客
 客も大振する情を
 雑人と同じか
 主と客とを定むる間
 客あるの稀接純

ひつらる成世表記

されて怪あるは
 といふらうは又い
 なる客ありあり
 らも怪あると
 のみは又あり。古
 あらうかきん牛あり
 するより強し村の若
 流とせるのせると
 解終

之忠働車と終
 前季子幼定は也
 能子と塔お也信
 多見無衆後面
 也件
 倡上賣人往来終

後序

此高士賣性集ハ何の爲めの作れる。唯
是集の懸帳を隨の業あり。裁まは
ず。今言とあり。又あり。此字附合
る。を純めして。偶あり。原くの隨然也。
故に。量世あり。此あり。あり。好士乃
。此子。此と例の。十。此。安。上。午
。編。一。裁。性。あり。室。子。隨。ち。き。著

述一々も。是。必。作者の。二。同。性。集。を
。一。も。是。必。作者の。二。同。性。集。を

一。も。是。必。作者の。二。同。性。集。を

文化二乙丑初春

山室亭東士織

目白坂中程

青陽堂采助版

新板 繪本東嶽綿

五冊物

細画 江戸名所

左六入

義大夫 長くけいふ本 長くいよせ本

一冊物

ちのふき子とていさるらさる 代半文

縁のんをんそん本法さうこの祿ん入
下巻に紅さー官は認め

通油町

濱松屋幸助

下七刀目

ちりぬ

